柱などを運び込み、その上に患者を寝かせて看護していた。

再現された病院壕内の様子
（沖縄県平和祈念資料館提供）

●最後の言葉

ガス弾攻撃に苦しめられ、医薬品や食料が不足し満足な治療を行うこともできない中、衛生兵は斬り込み隊として次々に壕を出ていった。「こんな悲惨な状況になるとわかっていれば、皆さんを預かるんじゃなかった…」小池は女子学徒らにそう語っていた。

アメリカ軍の激しい攻撃が続き、日本軍がほぼ壊滅した六月中旬、各地の女子学徒隊に解散命令が下された。小池は戦闘が鎮静化するのを待ち、六月二六日、ふじ学徒隊に対し解散命令を下した。

小池は隊長としての最後の訓示で、「現在まで奮闘いただいてご苦労だった」とねぎらい、自決を覚悟する女子学徒たちに「必ず生き残って家族のもとに帰りなさい。絶対に死んではならない」と諭した。そして「悲惨な戦争の最後を銃後の国民に語り伝えてくれ」と呼びかけ、一人ひとりと握手を交わした。

小池の指示に従い、学徒隊は2、3名ずつの組となって壕を脱出し、そのほとんどがアメリカ軍に投降した。いったん脱出した学徒の一人が壕の中に戻ると、副官がかたわらで見守る中、小池はすでに自決していた。五四歳だった。

南の孤島の果まで守りきて
御楯となりてゆく吾を
沖のかもめの翼にのせて
黒潮の彼方の吾妹に告げん

残された辞世の詩には、遠く離れた故郷を想う気持ちがこめられていた。

●その後のふじ学徒隊

小池の解散命令からほどなくして、沖縄戦が終結した。わずか三か月の間に約二〇万人が犠牲となり、その中には学徒隊も数多く含まれていた。特に激戦地となった沖縄本島南部では、解散命令の後に戦闘に巻き込まれたり、集団自決が行われたりした「ひめゆり学徒隊」など、ほとんどの学徒隊が半数以上の戦死者を出した。しかし、小池の言葉を守ったふじ学徒隊の戦死者はわずか3人にとどまった。

焼野原となった沖縄は、一九七二（昭和47）年に返還されるまでアメリカの統治下におかれ、戦後も困難な時期が続いた。ふじ学徒隊の元看護隊員たちは小池隊長のことばを生きていく支えとし、悲惨な戦争体験や、命と平和の尊さを様々な場所で語り続けた。

戦後六〇年以上が経った二〇一二（平成24）年、今後も学徒隊の体験を次の世代に語り継いでいくため、短編ドキュメンタリー映画「ふじ学徒隊」が製作された。当時の状況を語る元女子学徒らは、八〇歳を超える高齢となってからも、小池が眠る野沢の本覚寺を訪れて法要と墓参りを行うなど、感謝の気持ちを持ち続けている。

小池が自決した糸洲壕近くに建つ鎮魂の碑

（木村直木）

参考文献
佐久医師会誌編集委員会『医療の譜』佐久医師会
野沢北高等学校創立百周年記念事業実行委員会『野沢中学校野沢北高等学校百年史』

佐久の先人たち㉙

女子学徒の命を救った軍医

小池勇助（こいけ ゆうすけ）

（1890～1945年）

郷里で眼科医院を開業していた小池は、戦争の渦に飲みこまれ、軍医として各地に出征。最期の地となる沖縄で学徒隊の少女らを預かることとなる。戦闘が激化し命の危険が迫る中、少女たちに「絶対に死んではならない」と最後の言葉を伝えた。

●医学を志す

小池勇助は一八九〇（明治23）年七月二五日、南佐久郡野沢村（現佐久市野沢）で、男五人、女一人の兄弟の次男として生まれた。

生家は現在の千曲バス本社の辺りにあり、野沢中学校（現野沢北高校）に通っている頃から、母方の伯父で内科・小児科の医師だった阿部葉太のもとで医学を習い、その後は金沢医学専門学校（現金沢大学医学部）へと進み内科を専攻する。

第一次世界大戦が始まった一九一四年（大正3）年、金沢医学専門学校を卒業した小池は、同年十一月に金沢歩兵第七連隊に入営し、その後、陸軍軍医学校で眼科を専攻する。

一九二五（大正14）年、三五歳の時に予備役となった小池は、帝国大学眼科教室で研究生活を送った後、千葉県銚子町（現銚子市）石津眼科病院の勤務を経て、一九二八（昭和3）年に故郷の佐久へ帰り、佐久鉄道（現ＪＲ小海線）中込駅前に小池眼科医院を開業した。

中込駅前にあった洋風の小池眼科医院
中澤道保氏蔵

小池は診療時間が終わると近くの川で釣りをし、日曜日は家族連れで温泉に出掛けていた。気の短いところもあったが、根は快活で温情に富んだ人柄で、治療費を払えない患者からは集金しないなど、優しく義侠（ぎきょう）心をもった医師であった。

評判を聞きつけ、小池の医院には多くの患者が訪れていたが、世界の状況は不安定さを増し、やがて戦争へと突入していく。

●軍医として出征

軍医でもあった小池は、一九三七（昭和12）年から始まった日中戦争を皮切りに、一九四一年（昭和16）年からは満州、そして一九四四（昭和19）年八月、最期の地となった沖縄へと出征する。

一九四五（昭和20）年三月、小池が隊長を務めていた第二野戦病院に、那覇（なは）市にあった積徳（せきとく）高等女学校の生徒25名からなる「ふじ学徒隊」が配属された。学徒隊とは太平洋戦争末期、沖縄守備隊に動員された男女中等学校生徒の総称で、女子学徒隊は主に傷病兵の看護（食事の世話、排泄（はいせつ）物の処理、包帯の交換）のほか、手術の手伝いなどに従事していた。

前年十月にはアメリカ軍の空襲により那覇市の9割が焼け落ちており、ふじ学徒隊が野戦病院に配属されて間もなくの四月一日、沖縄本島にアメリカ軍が上陸し、地上戦が始まった。豊見城（とみぐすく）城址にあった野戦病院には次々と負傷した兵隊が運ばれ、小池や女子学徒たちは、不眠不休で治療や看護にあたった。

戦況はさらに悪化し、沖縄守備隊は司令部があった首里（しゅり）を五月二二日に放棄し、南部へと撤退する。小池らも砲撃を受ける中、雨の夜道を移動し糸洲（いとす）（現糸満市）のガマと呼ばれる自然洞窟にたどり着いた。

洞窟は幅が7～8ｍ、高さが5～10ｍほど。中は真っ暗で水が流れていたため、近くの集落から戸や壁板、